



男声合唱組曲「雪明りの路」 伊藤 整 作詩  
多田 武彦 作曲

春を待つ

梅ちゃん

月夜を歩く

白い障子

夜まはり

雪 夜

男声合唱組曲「雪明りの路」を作曲して

私が関学グリーの男声合唱にとり憑かれてからもう十数年になる。その間、トンネルの中の様なハーモニーを主体とした演奏から今日の演奏までを振り返ってみると随分変わった。

そして、今は、この団体は、今までこの団体に欠けていた「抒情的表現」を植えつけ、アマチュア団体としては名実ともに日本一の実力を生んで来た過去六十年の伝統の上に更に新しい技術上の伝統を育てようとしている。



私も、私を男声合唱の世界に引きずりこんだこの団体の為に依頼をうけて昨年は組曲「中勘助の詩から」を書き、今年は今日演奏される組曲「雪明りの路」を作曲した。

どちらも緻密な表現を要求する抒情的な曲に仕上げた。

昨年の東西四大学交歓演奏会が東京で行われた時、組曲「中勘助の詩から」において、指揮者の素直な解釈とメンバーの積み上げられた練習への努力によって、この組曲に対する私のイメージは立派に再現されていた。

今年も「雪明りの路」においてそれが行われることを確信している。そして新しい技術的伝統の完成がやがてはつきり見届けられるようになることを心から期待する。

1960年7月8日

多田 武彦

伊藤 整氏よりの手紙

お手紙を拝見しました。「雪明りの路」は、私の二十歳前の詩を集めたものですが、口語形式の散文で、韻律を重視したものではありません。ですから作曲されることなどこれまでほとんど考へてみませんでした。それが、近年になって作曲される機会が少しづつあり、それは詩と云ふもの考へ方や歌謡の考へ方が変わったせみだと思ひます。

先頃多田武彦氏からの手紙で「雨の来る前」が氏の手で作曲され、「朝日新聞」の全日本合唱コンクール課題曲に入選した事を知りました。なお関西学院グリークラブの東京リサイタルで、同じ多田さんの作曲になる他の六篇が発表されると云ふのは、私にとっては意外なほどのことです。あのやうな静かな感情を歌った詩が音楽として人に受け容れられるには、作曲がどのやうにされるかと云ふことに重点がありませう。私はそれを聞いて見たいと思つてみます。

もし私のあのやうな詩が音楽と協力できるものならば、私は詩と云ふものを、これ迄と違つたものとして考へることができるとは思ひます。大正初期に七五調、五七調などの定形律を詩が棄てて以来、日本の詩人たちは、ほとんど音楽との結びつきを放棄して来たのですから、問題は自由な詩形と音楽との関係と云ふことで起るのです。

これを考へるきっかけを今度の発表会で与へられるかも知れないと云ふのが今の私の感想です。

6月18日

伊藤 整